

ト、バラバを彼らに救し、イエスを鞭ちて十字架につくる爲に付せり。(マルコ十五〇二—十五、ルカ十三〇二—七、十三—二十四、ヨハネ十八〇二十九—十九〇十六)

一、汝はユダヤ人の王なるか。四福音書悉く皆、此の句を報道してゐる。如何にサンヒドリムの議員等が老獪にして、其の悪計を企むために平生矜持する國民的面目をも蹂躪して顧みなかつたかを示す。即ち耶穌に對しては「汝は基督なりや」と質問しつゝ、ピラトに對して故更政治犯人の如く装ひ、ロマ官憲の忌憚に觸れしめんとして「ユダヤ人の王」と稱したものととして訴へたのである。汝の言ふが如し。「然り」の意味。然しそれにはヨハネ十八〇三十三—三十七の如き説明を加へられたに相違はあるまい。十二、祭司長、長老ら訴ふれども何をも答へ給はず。何を訴たか、恐らくロマの主權に忌まするやうな言句を擇んだことであらう。其の奇蹟に由つて生じたガラヤ人の讚嘆の聲の如きも利用したに相違はない。斯くの如き惡虐に對して眞面な答辯は無益である。十四、されど總督の甚く怪しむまで一言をも答へ給はず。ピラトは耶穌の沈黙の不利なるを警告した。然し耶穌の依然たるに驚愕したのである。彼は其の第一印象からして此の訴訟の謂なきを知つた。何等虚勢もなく、威信も、富貴も、從者も軍隊も有せざる此の人物がユダヤ

の王！十五、祭の時には總督 群衆の望にまかせて云々。大祭の總督臨場を示す大赦であらう。其の起源は不明であるが、「恐らくロマ領となつて以來の事と思はるゝ」(ブルウス) バラバ。バル。アバは即ち「父の子」の意味で「神の子」と稱せらるる耶穌と其の名が一致してゐる。ジエロウムは「教師の子」と言ふ意味に解したとある。教師も亦「父」と稱したからである。(二十三〇九参照) 十七、バラバなるが、基督と稱ふる耶穌なるか。民衆の氣に入つた方を赦して人望を得んとしたもたらん。十八、嫉に因ると知る故なり。ピラトは始めから耶穌の人望をパリサイ人が嫉んだものと推した。十九、その妻……かの美人に係はるな。此の妻の名はプロクラと言ひ、ユダヤ教改宗者であつたと傳へらるゝ。夢に託して此の殘虐な夫に過誤なきやう忠言したものであらう二十、バラバの赦されん事を請はしめ、耶穌を亡さんことを勸む。形勢不利と見た祭司長以下は鬨氣となつて民衆を唆かした。暫くは騒々しくさはつたものであらう。二十一、二人の中いづれを我が教ちんことを願ふか。耶穌は其の順境にも逆境にも借に名を連ねらるゝは罪囚である。遊女、罪人の友は、審問に於ても罪人と同列であつた。二十二、十字架につくべし。數日前ホサナよと歡呼した人々は何處に行つたであらうか。形勢に恐れて沈黙したものであらう。二十三、彼何の惡

事をなしたるか。今はピラトは耶穌を赦すに最善の努力を試みてゐる。彼ら烈しく叫びていふ。十字架につくべし。次の節に由つて彼等が今は暴動に化せんとして熱狂したことを知る。十字架はロマの刑罰であつてユダヤの國法ではない。ユダヤ人たる耶穌を此の異邦の屈辱に會はせんと彼等はひしめいてゐるのである。二十四、群衆の前に手を洗ひて言ふ。「この人の血につきて我は罪なし云々。ピラトの審問の結果は彼には明かであつた。然し政治上、民衆の輿望を失はんことをのみ念とした彼は良心を枉げて、ユダヤ人の習慣に従ひ、其の手を洗つた。「此人の血」云々もユダヤの表現法である。第四節参照。二十五、その血は我らと我らの子孫とに歸すべし。不信と無智ほど大膽なものはない。「盲目蛇に怖ぢず」。此れを聽かるゝ耶穌は如何に思召したことであらうか。十字架上に於ける耶穌の祈禱はロマ兵士を思はるゝと共に此の種の民衆を思はれて、御唇から迸つたものであらう。二十六、耶穌を鞭打て、十字架につくる爲に付せり。此の「鞭つ」の原語フラゲロウサスはラテン語(ロマ)「Flagellum」から出たので、ロマの習慣である。十字架につける前には必ず鞭つた。大抵の罪囚は此の殘忍野蠻な拷問のために生命を失ふのであつた。

兵士の玩弄物たる耶穌 二十七—三十一

二七、ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につれゆき、全隊を御許に集め、二八、その衣をはきて、
 緋色の上衣をきせ、二九、茨の冠冕を編みて、その首に冠らせ、蓋を右の手にもたせ且その前に跪つき
 嘲弄して言ふ「ユダヤ人の王、安かれ」三十、また之に唾し、かの蓋をさりて其の首を叩く。三一、かく
 嘲弄してのち、上衣を剥きて、故の衣をきせ、十字架につけんさて曳きゆく。(マルコ十五〇十六—十
 九)

二十七、兵卒ども耶穌を官邸につれゆき、全隊を御許に集め。法廷を出て、總督の政廳恐らくアン
 トニアの要塞であらう。其所には兵營が附屬してゐた。全隊は聯隊の三分の一、約六百人とも言
 ひ、又は一小隊二百名の事(ブルウス)とも言ふ。恐らく後者ならん。即ち總督の親衛兵であ
 る。二十八、其の衣をはきて、緋色の上衣を着せ、二十九、茨の冠冕を編みて、其の首に冠らせ、蓋を
 右の手に持たせ云々。上級士官の肩に飾る上衣。カアルはピラトの着古しであつたであらうと想
 像してゐる。緋色は斯くの如き軍人の上着として至當な色である。茨を以て編んだのは苦痛を

加へるためではなかつた。唯だ委細かまはず手當り次第の品で作つたものであらう。然し耶穌に苦痛を與へたことは勿論である。葦は王笏に形取つたもの。ユダヤ人の王安かれ。下品な身振りで禮拜しつゝ、斯く言つた。それは寧ろユダヤ人全體に對する嘲弄であつた。三十、また之に唾し。王に對する忠誠の接吻の代りに唾したもの。此れは侮辱の絶頂である。三十一、故の衣を着せ云々。茨の冠だけは取らなかつたものと思はるる。

十字架上の午前 三十二—四十四

三三 その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。
 三三 斯てゴルゴタといふ處、即ち髑髏の地にいたり、三三 苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんこしたるに、嘗めて、飲まんこし給はず。三五 彼らイエスを十字架につけてのち、籤をひきて其の衣をわかち
 三六 且そこに坐して、イエスを守る。三七 その首の上に「これはユダヤ人の王イエスなり」記したる罪標を置きたり。三八 爰にイエスさまに二人の強盜、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。三九 往來の者どもイエスを譏り、首を振りていふ、四十 宮を毀ちて三日のうちに

建つる者よ、もし神の子ならば己を救へ、十字架より下りよ」四一 祭司長らも、また同じく學者、長老らさまにも、嘲弄して言ふ、四二 「人を救ひて己を救ふこと能はず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架より下りよかし。然らば我ら彼を信ぜせん。四三 彼は神に依り頼めり。神かれを愛しまば今すくひ給ふべし」我は神の子なり」云へり」四四 ともに十字架につけれたる強盜どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。(マルコ十五〇—三十二、ルカ二十三二十六—三十九)

三十二、彼等出づるとき、市内に於ては刑の執行は出来なかつた。特に十字架の刑罰に於ては不可能であつた。故に城門を出て行つた。天主教の基督傳著者アベ・コンスタント・ホア、ドは言ふ「ドロロサ街道は確なるものとは言ひ得ないが、然し尙ほ神殿の眞北に聳ゆる政廳はドロロサ街道の出發點で、カルヴァアライを圍める聖墓教會は其の終點に相違はない」(英譯二三二頁)。此れは勿論天主教の主張である。シモンと言ふクレネ人にあひしかば強ひて之に耶穌の十字架を負はしむ。北アフリカ、リビヤのクレネのユダヤ移住人である。田舎者と見てロマの軍法たる勞力の徵發を命じたものである。十字架は罪人が自ら負ふこととなつてゐるが、縦木は既に刑場に樹てられ、横木のみを負ふと言ふ著者もある。耶穌はゲツセマネの精神上の苦悶、徹夜の審理、

管刑等で身心共に疲勞し盡されてゐた。故に兵士は通り掛りの田舎者に賦役を命じたもの。マルコはシモンは基督者の父であつたと云ふ。基督者となつたのは後の事であらう。三十三、ヨルゴ多。其の形から命名したものと云ふ説が多い。天主教では前叙の通りに主張するけれども現今は全く不詳。三十四、苦味を混ぜたる葡萄酒を……嘗めて飲み給はず。魔酔藥である。エルサレムの富有な婦人たちが慈善のために之を供給したと傳へらるゝ。耶穌は十字架の苦悶があるがまゝに受けんことを欲せられた。故に之を拒絶せられた。三十五、彼等耶穌を十字架につけ。十字架については種々の説がある。ロマの十字架には三様あり。"crux immissa" (十) と "crux commissa" (T) と "crux decussata" (X) とである。何れも高さは地上九呎乃至十二呎。耶穌の場合は御頭の上に罪標が掲げられたと言ふので第一の型、即ちクルウクス・イムミッサであると言はれる。第三の型はアンデレが懸けられたと言ふ傳説から、聖アンデレの十字架と通稱する左右の手は釘で留めるか縄で縛つた。前二種の場合は足も亦重ねて釘で留めるか、縄で縛つた。繩をひきて其のまをわかず。詩二十二からの引用に相違ないが、然し多くの原本には其の説明の省かるること改譯の通りである。三十六、其所に處して耶穌を置る。弟子を始め

多くの共鳴者を有せらるゝ耶穌に對して救助者の出現せんことを彼等は虞れて看守したものであらう。三十七、その首の上に「これはユダヤ人の王耶穌なり」と……罪標を置きたり。其の罪標の文字をマルコは「ユダヤ人の王」とのみ書き遣し、ルカはマタイと同様に傳へ、ヨハネは「ユダヤ人の王、ナザレの耶穌」と傳へてゐる。日本改譯には四福音書に共に「罪標」と譯されてゐるが、原本は各異つた語を使用してゐる。然し氣に病むほどの事ではあるまい。因に店頭に好く見える十字架像の御頭の上に「I.N.R.I.»の罪標があるのはヨハネ傳の言ふ所をラテンの頭字で示したもの。始の「I」は「耶穌」、「N」は「ナザレ」、「R」は王、「I」はユダヤの略である。三十八、爰に耶穌と惜に二人の強盜。「爰」には同時の意味で事件の順序を示したものである。他の兵士に由つて行はれたものであらう。耶穌は十字架に於ても亦強盜と同列に立たれた。(第二十一節參照)。マタイやマルコが簡単に片付けてゐる此の事件に就いてルカは驚くべき出来事を掲げてゐる。同二十三〇三十九一四十三參照。三十九、往來の者ども、耶穌を罵り、首を振りて言ふ。都から郊外への往來の群衆。斯うなる答だと言はぬばかりの身振りである。四十、言を置ちて云々。此の句以下皆、耶穌に對する公訴事實である。法廷の噂が既に普く弘まつ

たものであらう。彼等は神の子が、に呪はれて十字架につけらるべしとは思ひ設けなかつた。四十一、祭司長らも亦同じく愚者、長老らと惜に。平生民衆の上に多大の威厳を保てる人々の不謹慎の態度、其の墮落を見よ。群民と共に路傍に於て罪囚を罵倒してゐる。如何に院内に於て相互に野人の如き罵詈雑言を交換すると新聞紙に傳へらるゝ某國の大臣、代議士と雖も此れほどの不謹慎を敢てする野蠻性はあるまい。尙ほユダヤの高官は宗教、道徳に於て一國の最高標準なるを思へ。四十三、彼は神に依り頼める云々。詩二十二〇八、箴言二〇十五、十六の引用。彼等の罵詈雑言は智識を用ゆるだけ深刻で、辛辣であつた。四十四、強盗どもも。共觀福音記者皆之を傳へてゐる。

「基督の苦き酒杯の最後の澱である。吾人に取つては其の怨恨骨髓に徹する仇敵と雖も尙ほ十字架上の苦悶を前にしてそれを即刻嘲笑に用ゆるほど殘忍に陥り得べしとは到底信する能はざる所である。然かも當時此の人々は吾人とは全く異なる感情を有してゐた。基督者たる情緒に全く相反するものとして苦難史を認むるに至らしめたる基督教信仰の文明的感化に感激する」(ブルウス)。然り。然しながら日本の武士道すら尙ほ斯くの如き惡虐、卑劣を賤むのであつた。

天地晦冥 四十五—五十六

四五 晝の十二時より地の上あましく暗くなりて、三時に及ぶ。四六 三時ごろイエス大聲に叫びて、
「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言ひ參ふ。わが神、わが神なんぞ我を見棄て給ひしこの意なり。
四七 そこに立つ者のうち或る人々これを聞きて、「彼はエリヤを呼ぶなり」と言ふ。四八 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をこり、酸き葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。四九 その他の者ども言ふ「さて、エリヤ來りて彼を救ふや否や、我ら之を見ん」五十 イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。五一 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震ひ、磐さけ、五二 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おほく活きかへり、五三 イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。五四 百卒長および之と共にイエスを守りぬたる者ども、地震その有りし事を見、甚く懼れ「實に彼は神の子なりき」と言へり。五五 その處にて遙に望みぬたる多くの女あり、イエスに事へてガリラヤより従ひ來りし者どもなり。五六 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ及びセベダイの子らの母などもゐたり。(マルコ十五〇三十三—三十六、ルカ二十三〇四十四—四十六)

四十五、晝の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。マルコも同じく三時間と言ふ。此れは或る人々の解する如く、日蝕ではない。過越祭は満月に相當して守るゝが故である。此れは超自然の暗であると言ふ人もある。一つは良心に痛める人類の罪にも由る。又地震前の氣象の激變であらうとも言ふ。關東大震災の際（午前十一時五十八分）午前十時頃より人々は氣象の異變を怪んだと傳へらるゝ。編者は二週後救護慰問のため長崎丸にて品川灣に着するや午後三時晩夏の日中なりしに拘はらず、東京市街晦暝として物凄きを感じた。夕立が襲ふ間近であつたが、新聞紙に由る凄惨の豫備感情が氣象の變化と結んで編者を戦慄せしめた。四十六、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』此れは詩二十二〇一の句であつて、マルコには『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』とある。此れは純全たるアラマイ語で、マタイのは『エリ、エリ』のみをヘブル語としたものである。ヘブル語ならば『エリ、エリ、ラマアア、サウクタニ』となるべきである。（ブルウス）。耶穌は全然をヘブル語か、アラマイ語が何れか一方で仰せられたものであらう。カアルはキャノン・ベロウンの句を引いて『神の怒の意義が此の叫を迸らしめたと言ふのは聖書以外に走る所以である。蓋し最後の息を引き取らるゝまで基督は父の熱愛せ

らる子であつて「我が神」、「我が神」との累語は斯くの如きときすら尙ほ其の父の愛に信頼せらるゝ證據である」と言ひ、スレエタアは「此の語は大いなる苦痛の下に在る者が其の寂寞を訴へんがために引用する句であつて、我等は人の子が神に積極的に見棄られ給ふやうな神學的干渉を試むることを得まい」と言つてゐる。四十七、彼はエリヤを呼ぶなり。嘲罵である。即ち聴き違へた風を装ひつゝ慰んだものであらう。四十八、其の中の一人……海綿をとり、酸き葡萄酒を言ませ……耶穌に飲ましむ。傍觀者の一人が兵卒の飲料たる酸味を傍びた葡萄酒を人情から與へたもの。海綿や葦は此の爲に豫め準備したもの。四十九、待てエリヤ来て云々。待て、待て、エリヤが來つて救ふまで飲ませるな意。五十、大聲に呼はりて息絶え給ふ。此れは心臓破裂に由つて死ぬ人の特徴であると多くの著述家は言ふ。五十一、幕よ、聖所の幕……裂けて二つとなり。地震のために自然に裂けたものであらう。さもあらばあれ、至聖所を民衆より距つる幕は裂けた。基督者の至聖所は天に在る。（ヘブル十〇九、十参照）。五十二、五十三。マイヤアは「此れは象徴的の發現である」と言ひ、ブルウスは物語が歴史に編みこまれたものであると言ふ。さう信じて然るべきであらう。五十四、百達長及び之と共に耶穌を守りあたる者ども。耶穌の處刑に當

つて兵卒と其統率士官である。實に彼は神の子なり。ルカには「實に此人は義人なりき」とある。五十五、多くの女あり。彼等がガリラヤから従つて來たものである。「愛は懼を除く」。婦人は此の時甚だ大膽であつた。五十六、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母。此の福音の讀者間に好く知られた三人であらう。マグダラのマリヤは始めて此の福音には此所で現はる。ヤコブ、ヨセフの母とはクレオバの妻か。次の一人はサロメ（二十〇二十参照）である。

埋 葬 五十七—六十一

五七日暮れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、五八ピラトに往きてイエスの屍體を請ふ。ここにピラト之を付すことを命ず。五九ヨセフ屍體をとりて淨き亞麻布につつみ、六十岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉しおきて去りぬ。六一其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤと墓に向ひに坐しむたり。(マルコ十五〇四十二—四十七、ルカ二十三〇五十一—五十六、イハネ十九〇三十八—四十二)

五十七、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人。共觀福音書は共にヨセフの社會地位が高かつたことを言ひ、ヨハネも暗にほめかしてゐる。而して何れも耶穌に深く心を寄せたことを傳へてゐる。五十八、ピラトに往きて云々。當日は金曜日で、既に迫つた土曜日の安息日に死骸を晒して置けなかつた。故にヨセフは其の面帕をかなり棄ててピラトに赴いて耶穌の屍體を要求した。ヨハネに由ると兵士は「鎗にて其の脅をつきたれば直ちに血と水と流れ出づ」とある。全く事切れて居らるゝのを見て、ピラトは之を請求人に下附した。ロマの國法に由れば十字架の所刑囚は皇帝の裁可なくして埋葬するを得なかつた。ピラトがヨセフの請求を直ちに聽いたのは耶穌を赦さんと欲した彼の願意とユダヤ人に對する彼の反感からであつたに相違はない。若しヨセフが請求しなかつたならば耶穌の屍體は會議に由つて指定せらるゝ共同墓地に埋められたことであらう(ライトフット)。六十、岩にほりたる己が新しき墓に納め。岩側を横に穿つた穴である。大きな石を以て其の孔口を塞ぐ用意があつた。ルカは「未だ人を葬したことなき」と言ひ、マタイは「新しき」と言ふ。六十一、マグダラのマリヤと他のマリヤ。他のマリヤをマルコに由つて前と同様ヨセフの母即ち耶穌の母であるとカアルは言ふ。更にウエルハウゼスは、

「此れは「ヨセの娘」と譯すべしと言つた」(イン・クリ・コンより)。

祭司長等の周章 六十二—六十六

六二 あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトの許に集りて言ふ、六三 「主よ、かの惑すもの生き居りし時、「われ三日の後に甦へらん」と言ひしを、我ら思ひいだせり。六四 されば命じて三日に至るまで墓を固めしめ給へ、恐くはその弟子ら來りて之を盗み、「彼は死人の中より甦へれり」と民に言はん。然らば後の惑は前のよりも甚だしからん」六五 ピラト言ふ「なんぢらに番兵あり、往きて力限り固めよ」六六 乃ち彼らゆきて石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。(マタイのみ)

此の物語は耶穌の御語が餘りに明かにパリサイ人に記憶せられてゐる點、其の他からマイヤアの如きは歴史的事であるまいと言ふに對してブルウスは十二〇四十に明言せられてゐる以上祭司やパリサイ人に聞えてゐない道理がないと主張してゐる。

六十二、明くる日、即ち準備日の翌日。安息日である。然かも祭司長らとパリサイ人らはピラトに來て運動した。六十三、彼の惑はす者。名を言ふ價值もなきものと裝ひて侮蔑を示すのである。

而して彼等は詐偽漢と罵つた。此の語源は「漂浪者」から出てゐる。カアルは此の句を以てユダヤ有司は曩の證言「我神の宮を毀ち三日にて建て得べし」の御語が復活の意味なるを理解しつゝ、彼等は之を悪用したと言つてゐる。死人の中より甦れり。メツツヤたる信仰に基きて復活が行はれると言ふ虞れがあつた。六十五、汝らに番兵あり云々。原本に就いては色々議論のある句であるが、改譯は其の一説に従つて明白に譯され、尙ほ欄外に一説を掲げてある。番兵の原語はラテンである。故に「汝等既に四名のロマ兵士を貸與されてゐるではないか」と言ふ意味であらう。典外聖書に由れば「ピラト乃ち百夫長(百卒長)ペトロニウスと其の兵を遣して墓を監視せしめたり」とある(杉浦博士譯二二頁参照)。

第二十八章

復活 一—十

一 さて安息をはりて、一週の初の日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んこて來りしに二視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り來りて、かの石を轉ばし退け、その上に坐

したるなり。三その状は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。四守の者ども彼を懼れたれば戦きて死人の如くなりぬ。五御使、たへて、女たちに言ふ「なんぢら懼るな、我なんぢらが十字架につけられ給ひしイエスを尋ねるを知る。六此處には在さず、その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見よ。七かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦へり給へり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて調ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり」八女たち懼る大なる歡喜をなして、速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとして走りゆく。九視よ、イエス彼らに遇ひて「安かれ」と言ひ給ひたれば、誰みゆき、御足を抱きて拜す。十爰にイエス言ひたまふ「惟るな、往きて我が兄弟たちにガリラヤにゆき、彼處にて我を見るべきことを知らせよ」(マルコ十六〇一—八、ルカ二十四〇一—十二、ヨハネ二十〇一—八)

我等の研究は殘忍無道、罪惡遂に天國の君主に及ぼせる胸を壓せらるゝ如き陰慘の物語を通した。今や一陽來復の歡喜に溢れつゝ此の記録に移る。

基督の復活は古來幾多の議論を生み、其の奇蹟的資質を強いて常識の程度を以て理解せんと試むる人々も少くない。然し斯くの如き議論に對して「二個の罪なき人格」は現今を以てすれば二個の奇蹟である。而して新哲學の第一原則として奇蹟は排除せらるゝ。彼等が考ふる如く

宗教の分野で廣い達觀を以て人類の進化論的發展を認めんとする大膽な態度は基督教から悉く人道の進歩を切り去ることである。基督教の基礎たる大いなる超自然の事實に對して、斯くの如き中途半端な妥協的な態度が有効に守らるゝと考へるのは畢竟夢に過ぎない。此れは新約全書中の基督に關する眞理全體を確實に論定してのみ解決せらるゝ。即ち、其の出現に於て、性質に於て、事業に於て、主張に於て、傳道に於て、其の末路に於て超自然たる基督……福音書が記録する斯くの如き基督の歴史上、死よりの復活は自然にして必須の地位を占めてゐる』。

(ジエムス・オ、ル。「耶穌の復活」二六六、七頁)。

一、安息日終りて一週の初の日のほの明き頃。土曜日の夕暮を以て安息日終り、次の日曜日の朝未明であらう。夜中は尙ほ前日に屬すると思へるものか(ホルツマン)。「ほの明き」は日本語の表現として改譯の獨創と思はるゝ。マグダラのマリヤは復活には主役を勤めてゐる。四福音書共に之を傳ふる。二、大なる地震あり。婦人が達する少し前であらう。三、その状は電火の如く輝き。天使の容貌である。四、守の者ども彼を懼れ。番兵は天使出現、地震等で生きたる心地もせず、爲す所を知らなかつた。五—七、天使の語である。「悲痛遣る方なき徹夜と其の損害と見えたる

胸を破る愁歎とに全く葬まれたる神々しき御語や瀧容や其の品性の美はしさの眷戀忘る能はざる回顧は復活の事實の確信さるゝと共に此の聖な婦人の胸に甦りて歡喜極まりなかりし様は我等の想像すら爲し得ざる所である「カアル」。九、觀よ耶穌被等に過ひて云々。天使に命ぜられて弟子たちへガリラヤにて主が會はるゝ歡びを傳へんとして往くうち、見よ、彼等も其の主に會ふ第一の特權を與へられた。十、懼るな、往きて我が兄弟たちに云々。天使の傳言と同様であるが、其の瀧容と御語に暖かな調子のあるのが手に取るやうに浮び出さる。此のとき始めて主は「我が兄弟」と言ふ御語を弟子たちに對して用ゐられた。ヨハネ二十〇十七、ヘブル二〇十一參照。

番兵の復命 十一—十五

十一 女たちの往きたるさき、觀よ、番兵のうちの數弟、刑にいたり、凡て有りし事どもを祭司長らに告ぐ。十一 祭司長ら、長老らと共に集りて相議り、兵卒どもに多くの銀を與へて言ふ、十三 「なんぢら言へ、その弟子ら夜きたりて、我らの眠れる間に彼を盜めり」と。十四 この事もし總督に聞えなば我ら彼を宥めて汝らに憂なからしめん」十五 彼ら銀をとりて言ひ合められたる如く爲たれば、此の話をユダヤ人の中にもひろまりて、今日に至れり。(マタイのみ)

十一、番兵の數人……凡て有りし事どもを祭司に告ぐ。地震に脅かされ都に逃げ歸つた者共である十二、多くの銀を與ふ。シケルであつて兵士らが賂賄として他では獲得し得べくもない金額を吝氣もなく與へた。十四、我ら眠れる間に盜めり。虚偽ほど予盾するものはない。眠つたものが如何にして盜んだと知れやうか。盜んだものを取返し難い番兵でもあるまい。番兵の惰眠はロマの軍法では死刑に相當する。ピラトに事實を告白するよりも更に危険である。彼等は銀を受取つてからは蔭では手を拍つて笑つたであらう。十五、彼等言ひ合められたる如く爲たれば。世間には斯くとも言ひ振したものであらう。此の話ユダヤ人の中にひろまりて今日に至れり。此の福音書の回覽されたのは此の事件四十年乃至それ以上の後である。以上の記事は簡單であるが、此れに由つて弟子たちが屍體を隠匿して復活を捏造するが如きことの不可能であつた事情を期せずして物語つてゐる。

ガリラヤに於ける邂逅 十六—二十

十六 十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給ひし山にのぼり、十七 遂に調えて拜せり。然

れど疑ふ者もありき。十八 イエス進みきたり、彼らに語りて言ひたまふ、「我は天にても地にても一切の權を與へられたり。十九 然れば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、二十 わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」(マタイのみ)

此の偉大なる耶穌の最後の御語は、語らるゝ人にも事情にも至當のものである。恐らく此れは耶穌が一定の時期と場所とに於て御弟子に對して語られた御旨の正確な報道であるまい。其の間に實際と理想とが錯湊して、此所に此の時耶穌が授けられた所と、使徒時代の教會が其の復活し給へる主の御旨として漸次に考ふるに至れるものが、移り行く年月と共に、イスラエルの危期到達せる後に愈明かとなつて混淆せしものと思はるゝ。我等は此所に(一)世界的意義の基督に歸せられ(天にも地にも一切の權)、(二)福音の絶對的に世界に及ぶ運命、(三)弟子として准允の儀式たるバプテスマ、(四)バプテスマに含まるゝ基本的三位一體の思想、(五)第四福音書に物語らるゝと等しく靈的基督の現在を發見する。本福音記者が此の福音を記録したるは當然エルサレム陥落後にして當時に及んで始めて使徒教會は此の程度に基督者思想を啓發せらる

るに至れるに相違なし。これがために復活せる主の御唇より語られたものとして教會の信仰の告白を概説したものである。「地上を歩み給へる耶穌の親しく語られたものではないけれども、天より顯はれたる耶穌の御語として此の福音記者は此所に、彼等の昇天し給へる主の御旨及び約束なりとして基督者社會が認むるに至れるものを概論として示すものである」(ヴァイス・マイヤ)以上(ブルウスより)。

十六、十一の弟子たちガリウヤに往きて……山に登り。山ではない。カアルはエル・ハム即ろカベナウムの背後の高所で、「山上の垂訓」の小丘ならんと言ふ。兎も角、耶穌が屢生前赴かれた所で、約束の地點である。十一の弟子はユダを除いた十二人の各員。十七、拜せり、されど疑ふ者ありき。恐らくトマスのことを指せるものならん。ヨハネ二十〇二十五。(又マタイナ十六〇十一、十三、ルカ二十四〇十一、三十七参考)。全員始めは皆復活を疑つた。十八、耶穌進み來り。御語は最肅であつたが、態度は親しみを以て近かれた。天にても地にても。メツシヤは其の宇宙的の王國に進まれた。權を與へられたり。九〇二十七、前に授けられた御語が、復活に由つて其の權威の地位に陞られたものと思はる。ローマ一〇四参照。マイヤアは此の權威は人の子の卑しき狀が終つ

て、光榮の地位に即かれたときに授けられたと言ふ。十九、もろもろの國人を弟子となし。ユダヤ人的偏見は全く棄てられ、ユダヤ人も異邦人も皆弟子とすべしとある。弟子とするとは「教へ導く」意味である。父と子と聖靈の名によりて。三位一體の思想で、神の統一性が示されてゐる。バプテスマを施し。基督者にバプテスマを施すことは此の福音書では此所一個所にのみ記さるる。即ちバプテスマのみが弟子たる唯一の條件で、これが其の特質である。二十、命ぜし凡ての墓を守るべきを教へよ。バプテスマの準備のみならず、其の後にも絶えず教育せられねばならぬ。單に教理を知るのみならず、之を實踐するためのである。正統の思想を抱くのみならず、之に準じた正確な生活を營むに在る。觀よ、我は世の終まで常に汝らと惜に在るなり。此の信仰を傳承するもの、使徒と共に、「我」即ち「復活し、昇天し、總ての權を有する者」が永遠に其の傍に在る意味。主耶穌は既に四十日間其の靈的存在を彼等に示して彼等に目を以て見えずとも必らず惜にいまし給ふ事を教へられた。而して基督の教會は此の状態を以て永存する唯一の施設である。

マタイ傳福音書講義 終

昭和二年二月二十日第一版印刷
昭和二年二月廿五日第一版發行

マタイ傳福音書講義

定價貳圓七拾錢

版 權 所 有	
著 者	日 高 善 一 京都市室町丸太町上ル
發行者	東京府西巢鴨町堀之内一〇三五 三 松 俊 平
印刷者	東京市麴町區飯田町二ノ五〇 猪 木 卓 二 京 華 社 印 刷 所

發行所 東京府西巢鴨町堀之内一〇三五番地 香柏社書店
出張所 東京驛前丸の内ビルディング三〇一大信社内

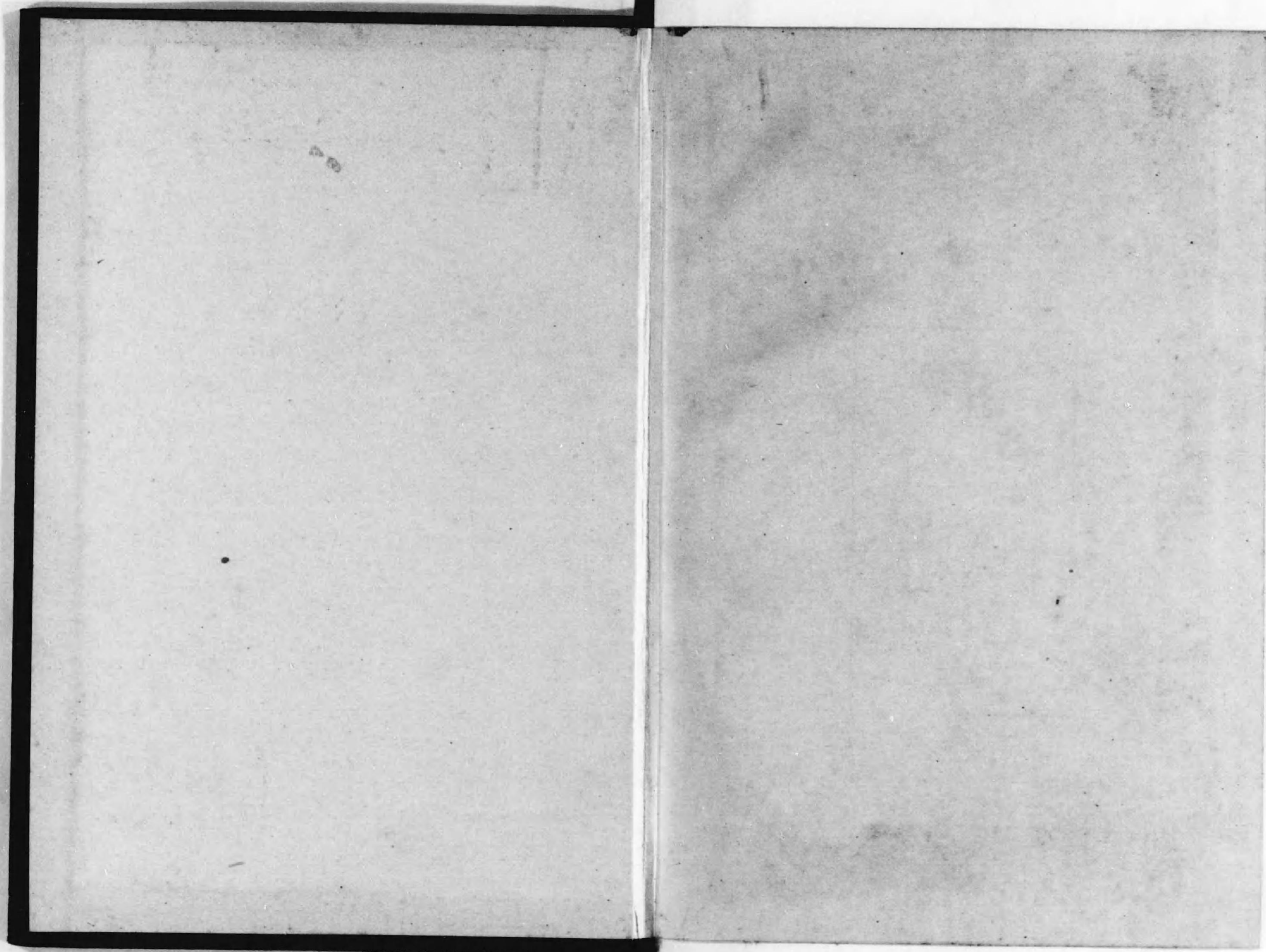
振替 東京三三二〇〇番
長野三三一二番

香柏社營業科目

基督教主義文學の刊行及頒布
聖書及宗教書類取次販賣
其他一般内外新刊書販賣

香 柏 社 書 店

出張所
東京西巢鴨堀之内一〇三五
振替長野三三一ニ
東京驛丸之内ビルディング
三〇一大信社内
振替東京三三二〇〇



終